

三十四歳で初召集

妻子を残し河南作戦に参加

長崎県 伊藤 三十郎

私の出生地は大分県日田郡西有田村、現在の日田市三宮町で、明治四十四年九月二十日に生れたのです。父は農業、母は私が小学生の時に死亡、七人兄弟の末弟です。

昭和六年十二月一日、徴兵検査を受け、第一乙種、第二補充兵となりました。その後、醬油会社に勤めていましたが、大東亜戦も勃発し、その後は大分連隊区から教官が来て軍事訓練をやっていました。

昭和十八年六月十日、初めて臨時召集を受け、都城の歩兵第二十三連隊に入隊したのです。私は三十二歳頃の結婚で、妻は妊娠していました。しかし、妻の父親は日露戦争で小倉の騎兵だったので。義父は「俺がいる、後のことは絶対に心配するな」と力付けてく

れたので、私は気を柔にして征くことが出来ました。入隊し、四〜五日で北京へ行くため、下関港を出航しましたが、六月十一日だったと記憶します。夜、朝鮮釜山に上陸、有蓋貨車の床に藁を敷き乗車、六月二十三日鮮満国境安東通過、六月二十五日山海関を越え北支に入りました。

七月一日、天津、保定、聞喜を経て安邑（運城の東）着、歩兵第二二六連隊（第三十七師団―冬兵団）に着いたので。輸送中は、昼は空襲があるので列車を降り山の中に退避する。夜間の運行だから客車の窓は閉めて暗くしての輸送でした。

安邑には連隊本部があり、教育は黄河の方へ移動しての訓練でした。私の中隊は暑い盛り、風の無い畑ですから相当厳しいものでした。私は軽機関銃班でしたし、戦闘に行く前の訓練故、夜間を想定して、黒い眼鏡をかけさせられ、軽機関銃の部品を放り出し、それを捜させる。捜せないとビンタを張られ、夕飯を食べさせられない。軍隊の訓練は厳しいことは知っていても、理屈なくてもやられる。無茶苦茶だ。咽喉が渴い

て、河の流れの所に何時汲んだか判らない水を、住民がくれるのを呑むのですが、それでも美味しかったです。

訓練と同時に、だんだん戦争とはこういう酷しいものだと実感させる教育も受ける。戦争とは殺すか殺されるか、心身共に厳しいものだと体験させられました。

昭和十八年七月から十九年四月まで、その期間中に黄河の土手の陣地で一か月ぐらい勤務しました。陣地には三八式野砲が配備されており、砲身の手入れは中国人の軍夫にさせ、鏡のように磨かれていました。警備中俘虜を捕らえたりし、その取調べも厳しいものでした。自分達の戦友が戦死させられたり負傷したりするので、戦場とはそういうもので、敵もこれに対する反撃のためか対岸から射撃をってきます。幸いに我が方には犠牲はなかったものです。

昭和十九年四月十八日、河南作戦（京漢線完全打通）発起のため安邑を軽機関銃の弾薬手として出発しました。中隊長は福岡県出身の赤間中尉です。行軍中先発隊が、中国兵の昼食の跡を発見したので、急遽前

進の命令が発せられました。その時は重機関銃も来ませんでした。敵兵が固まって逃げる。これを射つ。敵の頭や手足に当たって谷間の水は血で真赤。敵兵はほとんど倒れ全滅でした。まさに屍山血河でしたが、抵抗する敵もおり、手榴弾戦もありました。

逃げた敵は、本隊を呼び戻したのか、夜になると逆襲がありました。山の上から厳しく射撃して来る。これに我々が応戦すると、その火華（火光）を敵が見て逆に射って来るのです。そのため夜間の射撃をしないように射撃中止の命令が来る。その後、我が軍の砲兵が援護射撃を開始し、敵の射撃を制圧してもらったものです。この戦闘が私の初陣です。実感として、弾は飛んで来る、初めてのことなので頭は上げられないし、食事も出来ず腹は減るのです。幸いに死傷は無かったです。

河南作戦が進んで、私たちの部隊が洛陽へ到着したのは他部隊が陥落させた後でした。その後京漢線に沿って武昌まで南下するのですが食糧の補給は無い。倉庫の小豆を見付けて徴発、毎日小豆だけで三〜四日

過ごしました。初めの一日は良かったのですが、これが四日連続となると、腹がくちくちくなってしまふ。

七月、武昌へ着くまでは徒歩。漢口に着いて、揚子江の渡河は五十〜百メートルもあるような筏に乗り、中国人が櫓で漕ぎ、上流から下流の対岸へ着くのです。その筏には一個中隊ぐらゐは乗れたのではないですか。しかし、昼間は敵機の空襲があり駄目なので渡河は夜だけでした。

漢口の揚子江対岸が武昌です。その武昌の夏は屋根に止まった雀が暑いので落ちてしまふという程です。私は八月二十五日、下痢がはげしく、入院しました。多い人は一時間に何回も便をしました。病院は武昌の大きな寺院で、我々は発熱と下痢のため外の石畳の上で寝ていたのですが、部隊（第三十七師団）は湘桂作戦に参加のため長沙へ前進しました。列車は薪を焚いて動くのだが、私たち十四、五人は歩けぬので後方へ下らされ、武昌の病院に入院させられました。

病院は武漢大学の立派な建物でしたが、そこには一週間で、その後南京へ後送されるため揚子江を下り

ました。揚子江では空襲でやられた船が着底しているのを見ました。病院船の中で、渡辺はま子が箱の台の上にあがって歌ってくれたのを記憶しています。南京の病院ではだんだん回復し、九月二十日南京の陸軍病院を治療退院することが出来ましたので、再び揚子江を溯航して十月三十日、湖北省の漢口の北北西孝感に着きました。

当時、既に湘桂作戦が湖南省や広西省で展開していて、作戦師団の大部分は作戦に参加し、留守の駐留部隊として混成旅団や野戦補充隊が編成されました。私は第九野戦補充隊に転属し、昭和二十年三月一日、江西省九江の第六大隊第四中隊へ編入されたのです。第九野戦補充隊は、三月二十日、独立混成第八十四旅団（至勇兵団）第五〇二大隊となったのです。

駐屯地は星子県星子でした。兵舎は蒋介石軍の元の軍官学校の跡です。星子では在留邦人が軍の糧秣等の世話をしてくれました。私は内地で醤油会社にいましたので、醤油や味噌の作製について現地の日本人に協力するように命ぜられ、短期間で味噌を作りまし

た。

八月一日、上等兵に進級しましたが、星子で終戦になったのです。中隊長から「全員集まれ」と言われました。その日は月のいい晩でした。兵舎の庭にアンペラを敷いて、中隊の酒など全部出し、中隊長は「戦争は終わった。皆仲良くやってくれ、何時内地に帰れるか判らない。階級は無くなったが、これから体に気をつけてくれ」と話をし、皆で酒を酌み交わしました。これからどうなるのか、内地はどうなったのか、家族はと心配をしながらですが、階級もなく、皆が戦友として一夜を過ごしたことは忘れられない思い出でした。

昭和二十年九月二十日、九江の星子を出発する時武装解除されたのですが、自衛用に五人に小銃を一挺ぐらい持たせられて、江西省彭沢県磨盤山に着いて、そこで自活することになりました。そのため、住民の長に協力してもらい、山の林から木を伐採し家を立て、藪で屋根を葺いた。兵隊の中には大工もいるし屋根屋もいて結構立派な住居が建築され、野原に一部落が出来ました。また記念に野球場、グラウンドも造って部落

民に残しました。

部隊は駐留時の毛布や食糧があったので、部落長に毛布や塩などをやって非常に好感をもたれ、畑を耕作したり、田植の手伝いをしたり、玉蜀黍の種を蒔き、住民に残したりしたので、日中の関係は概ね良好でした。部隊でも、階級は無しだと、威張っていた者に謝らせるなどの事件は若干あったのですが、大きな乱れは無く、自主的な抑留生活をしました。磨盤山を出発したのは昭和二十一年五月二十三日です。

貨車で上海へ集結したのだが、無蓋貨車なので、住民や中国兵などから荷物や時計を略奪されたり、盗まれたりの事件も時々ありました。そのためなるべく貨車から頭を出さぬようにし、無用な争いを回避しての列車行でした。敗戦のため報復的な行動をする者がいたのも止むを得なかったと思ひ、ひたすら我慢を通して上海へ着いたのです。

上海で仮泊したのは郊外で、野原の凹地の溜り水で体を洗ったりしました。殺虫剤のDDTを頭から散布されましたが、時々使役にも借り出され、日本軍から

押収した倉庫の物品の整理や運搬もしました。しかし、中国人で非常に理解のある人もいました。埠頭の近くにいた時、日本軍から接収した被服倉庫の使役に出ましたが、我々の服装があまりポロポロなので、新品の帽子、服、靴と取り替えてくれ、大変感謝したこともありました。

上海からの帰国はLSTに乗船し、佐世保に着いてから船中で注射をしてくれましたが、復員船が多く上陸には日数がかかるといふ。そのため船は外海に出て博多を過ぎ、何処へ行くかと不安に思ったら山口県の仙崎港に入港しました。ここは蒲鉾の産地として有名ですが、大きい船が着岸出来ぬためか、本船から漁船やポンポン船で埠頭に上陸しました。

仙崎町では校庭に町長などが来られ、復員式をしてくれ、その上に羊羹や大きな握り飯まで下され、大変感謝をしました。その日、九月一日のことは忘れられません。九州地区は汽車が出るというので私は乗車、車中で握り飯を食べ、羊羹は土産として持ち帰りました。その時、初めて関門トンネルを通ったのです。大

分駅から電報を打ったら六〇七十円とられました。復員の時支給された五百円は高額だと喜んだのですが、こんなに物価が高くなったのかと驚き、これからの生活にも不安を感じ、金は無駄には使えないと思ったものです。

電報を受け取った兄が、リヤカーを曳いて日田駅まで迎えに来てくれました。出征の時、身をもっていた女の子は大きくなっていました（今は結婚して幸せに生活している）。

私は前の会社に再度勤め、復員後遊ぶことなく働くことが出来ました。思えば武昌で、発熱と下痢のため入院しましたので、湘桂作戦に参加せず駐屯地勤務でした。しかし本隊は、湖北・湖南・広西の各省、仏印と転戦したため、戦友で生き残った者は四〇五人しかいません。九江の至勇部隊は全国各地バラバラで、中々会えませんが、郷里に帰ってから調べてみますと大分死んでいる。私は、初年兵としては高齢者だったのに生きて現在あることを幸せだと痛感しています。